

成願寺

季報

104

平成 27 年 2 月 18 日
(2015 年)

目次

「本来無一物な私たち」大橋紀宏	1
坐禪研修会の報告	7
秋の観音詣りの報告	9
山内短信	12

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

平成二十六年秋の観音詣り説教

本来無一物な私たち

石川県大本山總持寺祖院単頭兼維那・七尾市長齡寺住職 大橋紀宏

みなさま、こんばんは。改めまして、本日はようこそ祖院へご参拝、ご投宿くださいました。前においでいただきましたのが、平成二十一年の夏でしたから、五年振りということですが、その際も私がご案内とお話をさせていただきました。



石川県大本山總持寺祖院単頭兼維那
七尾市長齡寺住職
大橋紀宏師

仏教の教えといえますのは、八万四千の法門と言われますようにたくさんございます。ですけどこれは、たった一つのことを伝えたいがためにいろいろな方便を使つて説いているということです。本日のお話も行き着くところは前回と同じかなと思うわけですが、切り口を少し変えて進めさせていただきましたと思います。

みなさんは法戦式(ほっせんしき)というのはご存じですか。首座(しゆざ)といひまして、修行僧の第一座、つまりトップの修行僧が住職の代わりとしてその法を伝える、その力があると知らしめる儀式です。多くの参列者が見守るなか、首座は大衆からの問いに答える。大きな声で問答を交わすわけですが、その法戦式でよく題材とするのが「從容録」。私どもの教科書ともいふべき中国の古い仏教書でございまして、その第二則に梁の武帝(ぶてい)(四六四〜五四九)と菩提達磨(ぼだいだるま)大和尚の有名な話が載っております。

梁の武帝という方は、中国南北朝時代の南朝の初

代皇帝で、大寺院を建立し、数十万の僧に供養し、自らも具足戒を受けて袈裟を着け、經典を重んじた信仰心の篤い仏教守護者でありました。そんな武帝の元にインドから三年の航海を経て達磨様がおいでになった。武帝が尋ねられます。「如何なるか是れ聖諦第一義」。これは、仏教の一番肝心要なことはどういふことか、という質問です。これに対する達磨様の答えがたった一言「廓然無聖」。

達磨様の答え「廓然無聖」の廓という字をご覧いただきたいのですが、城郭の郭に麻だれ「广」が付いています。城壁に囲まれた城の中に広大無辺な広場があると思ってください。それはからりとして無尽蔵。一点の曇りもありません。これが何かと言いますと、私たちのこの身体のことです。

「無聖」と言いますのは、これは、聖だとか凡だとかそんなものを飛び越えているということです。善悪や是非や功德無功德もない。

六根すべてがいつも清浄

手を打ってみます。「パン」と聞こえました。みなさんが聖人だから聞こえたのでしょうか。凡人だから聞こえたのでしょうか。そんなことは何も関係な

く、「パン」とやればその事実を聞くことができる。

では、「パン」という事実、それはいまだどうなりましたか。もうないんですね。きれいさっぱりどこにもありません。私たちは本来無一物。重なることがないのです。だから無尽蔵なんです。

どういふことかと申しますと、六根のこの働き、「般若心経」にも書いてありますが、眼も耳も鼻も舌も身体も意識もいつでも清浄なのです。いまの事実だけが重なることなく連続している。人間の「思い」のように、ああでもないこうでもないと思痴を残すようなことをこの身体はやっていないのです。すばつといまの事実だけです。

障子を見ました。次に天井を見ました。するとどうですか。一瞬で障子の様子はまったく無くなつて、いまは天井が眼に映るばかりです。そんなことは当たり前だろうと思われるかも知れませんが、ここが一番大切なのです。

さきほど手を打って「パン」という事実を聞いていただきました。もうどこにも残っていません。でもこの耳が聞いたことが、人から言われた言葉だとしたらどうでしょうか。

本日みなさんは、朝早くから旅行鞆を抱えてうき

うきと家を出て来られたと思います。そこへ近所の方に偶然会って「あらあらあなたまたご旅行なの」なんて言われたらいかがですか。にこやかに「ちよつとお寺詣で、行つてきます」なんて言いながらも内心では「余計なお世話」と思っている。でも、言われた言葉は、いまあなたの身体に残っていますか。どこにもありません。でもあるとしたならば、それは「思い」として残つてしまつているのです。

香りやにおいで考えてみましても同じです。お寺に足を踏み入れますとお線香の香りがいたします。こちらの祖院は山に囲まれていますから、新緑の季節には山のおいと申しますか、爽やかな緑のにおいがする。でも東司（お手洗い）に参りますと、東司のにおいがするわけです。においはそれぞれの場所に事実としてあつて、私たちの六根の一つである鼻がそれを事実として嗅ぐ。そこには良いとか悪いとか書いてありません。ですから「良い香り」とか「これは臭い」などと思うのは、過ぎ去つたものを相手に悩んでいるということなのです。

人間はどんな人でも「いま」という時しか生きておりません。でも、他の動物と違つて脳が発達し、「思い」というものがございますから、「思い」で過去を

遡ったり、未来を描いたりする。でもどんなに過去を悔やんでみても、どんなに先の心配をしてみても実際には何もできないわけです。だから悩むわけなんです、そんなことをして苦しむのは誰かと言えば、それは自分自身なんです。

私たちの持つ、最も根本的な三つの煩惱「貪り」^{むさぼ}「瞋り」^{いか}「妬み」^{ねた}の三毒はこの身体の一どこにあるというのでしょうか。「あの人があんなひどいことを言つたから、いまも私は腹が立つている」なんてことを言いますが、でもそれは、一〇〇%相手のせいではありません。腹が立つ「思い」を残して生活しているのは一体誰なのでしょう。他でもない、自分自身なんです。

私は息子がおりますが、自分の好きな料理がお膳にありませんと「なにも食べるものがない」と言つてふてくされます。「じゃあ食べなくて良いよ」と応えるわけですが、食べる前から味がするのでしょうか。どうでしょう。先ほどみんさんへ差し上げたお膳ぱつとご覧になつて「あ、これは好き。これは嫌だな」と思われたかもしれません、舌の上に載せるまで味はしていないんですよ。それなのに食べる前から「思い」によって判断してしまふ。そういう「思い」

が生きて行くことの邪魔をしているわけです。本来はそうじゃない、私たちの六根はいつでも清浄です。

私たちのこの身体の天然の働きには、「貪り」「瞋り」「妬み」などどこにもない。あるのは「思い」だけです。嫌なことがあっても身体は瞬時にして離れているのです。あの人のことを十年恨んでいるなんて言いますが、もうとつくにこの身体にはないのです。元々ないわけですから、もっと時が過ぎた時に、元々ないことに気がつくということなのです。

その「思い」も何でも出てくるのです。それもいまの様子が留まることなく動いています。そんな「思い」を留めずに動いていることに気づくこと、そのことを、本来のからりとしてなにもない「空」とか「無」だからこそ「思い」も移り変わり留まっています。聖も凡もない。達磨様の言われた「廓然無聖」というのは、こういうことを伝えたかったわけなんです。

しかし武帝は、もうまったく理解不能なんです。『朕に対する者は誰ぞ』と重ねて尋ねています。これは、「でも私の目の前にいるあなたこそ、聖者ではないのですか。そうでなければ、いったい誰だというのですか」ほどの意味でしょうか。武帝と達磨様の話がまったくかみ合っていないことがわかります。

達磨様は「不識^{ふしき}」と答えています。これは「知らない」という意味ですが、ここでは認識以前ということです。「ただあるだけだ」と言うことなのです。

ただ眼の前にある真実

私たちの周りのものもそうです。全てのものが、事実としてただそこにあります。名称があると言いましても、それは人間が勝手に名付けたことであって、そのものの自体の本質になんの関わりもありません。ただそこにあるだけ。

こちらに障子がありますが、眼が認識して、その後に、障子という言葉を知識として知っていますから、障子だと思う。言葉を知らない赤ん坊なら、眼に障子が映るだけです。それがだんだん年配になってきますと、自分の「思い」が確立されていますから、なかなか清浄になれません。眼に映ったものを認識しますと、歳を重ねて言葉をたくさん知っているぶん、自分にとっていま眼に映っているものは「こうだ！　こうに決まっている」という「思い」が強くなってしまふ。これが、頑固ということでしょうか。例えば、「祖院の障子は立派だな」とか、この「電球はいいな」と思うということは、過去の「思い」

を引っ張り出して比較しているということです。過去の記憶がたくさんあればあるほど、瞬時にそれを引っ張り出して比較している。そうでなければ、祖院の障子を見て立派だと思えることができません。たとえば、私でしたら、自分のお寺の障子の記憶がございませうから、その記憶が無意識のうちに脳裏に浮かんで「祖院の障子は立派だな」と思うわけです。

禅宗ではよく、「父母未生以前に問え」ということを申します。これは、生まれる前はどうかであったかということなんです。ようは、自分を自分と認識する前はどうかしていたのかということです。それは、善も悪もない。ただあるだけなんです。道元禪師は「只管打坐」とおっしゃいましたけど、ただひたすらに事実だけ見ているということです。その状態のことを、達磨様は「不識」とおっしゃった。

武帝は人格者であり、佛法天子と言われたほどの方でしたが、達磨様はこれでは自分は役に立たないと思われて、揚子江を渡り、やがて少林寺に至って面壁九年と言われる坐禅を修行されるのです。

次に「廓然無聖」の「頌」をご紹介します。これは今申し上げた本則の意義や禅旨を表すもので、「頌に云く、廓然無聖。来機逗庭」と言っております。「来

機」といいますのは参じて学ぶ者を言いますので、この場合は武帝のことを差します。「逗庭」は、小さな小径、袋小路みたいなことと大きな岩を言いますので、それだけ達磨様と武帝はかけ離れていた。話になりませんでしたということです。

「得は鼻を犯すに非ずして斤を揮い」。これは、中国の「莊子」という逸話の中にありますが、ある城の壁に穴が開いていた。そこで壁屋さんが、穴をふさぐために泥をすばんと投げた。そうしましたら鼻の頭にちよつとその泥がくつついた。それを見ていた大工さんが、私の斧でその鼻の頭についた泥をとつてやろうと申し出た。普通ならばそんなことは危なくて、ちよつと待ってくれという話ですが、その壁屋さんは、「ああ、頼むよ」と言つて、大工さんは斧で泥を落としたという話なのですが、この壁屋さんはたいそう度量がありますね。

つまりここでは、達磨様との問答に対して、武帝の度量がなかったものですから、任しきれなかったということをお願いしたいわけです。

「失は頭を廻らさずして甑を墮す」。孟敏という青年がお櫃を担いで歩いてた。そうしましたら、それを落として割ってしまった。失敗をしたのに、孟

敏は頭を廻らして見もしなかったというのです。その様子を見ていた人が、「ちよつと待って、普通なら誰でも困った様子になるのに、あなたは意にも介していない。どういうことですか」と尋ねています。孟敏は、「壊れてしまったものは、今さら後ろを振り返って見ても直るわけではない。困ってみたところでどうにもならない」と答えています。

大人物というのは、小さなことにくよくよ困らないということですが、武帝との問答を壊れた「甌」に例えて、とても見込みがないとわかった達磨様は、振り返ることもせず揚子江を渡り、去って行ったということです。

「寥寥として少林に冷坐し」。少林寺において、冷静に心を乱すことなく正身端坐して、「黙黙として正令を前提す」正しい法令、即ち仏法全体を表している達磨様であった。「秋清うして月霜輪を転じ」。秋の清らかな月が空を行く。「河淡うして斗、夜柄を垂る」。「河」というのは天の川のことです。「斗」は北斗七星。これは、北斗七星の柄杓が私たちのほうへ垂れて、手に取れるようだということなのですが、祖院におりますとこれが実感できます。それは、朝の四時に坐禅に参ります時、北斗七星の柄杓が坐禅

堂に向かつて垂れているのがよくわかるのです。仏法が私たちの手の届くところにちゃんとあることを示しているのです。

「縄縄として衣鉢児孫に付す」。そうして達磨様の仏法は、私たちに連綿と伝えられているが、「此れ従り人天薬病と成る」。達磨様が伝えられた仏法は、人間界と天界、要するに人間的考え方に陥ると薬にはならなくて病になりますよと注意されています。ということでは「廓然無聖」のお話は終わりとなります。

来年總持寺では、二祖峨山韶碩禪師の六百五十回大遠忌を迎えます。峨山禪師とご開山の瑩山禪師の間で交わされた「兩箇の月」という公案がございまして、最後にご紹介いたします。これは、「月が二つある、どういうことか」という師から弟子に対して出された問題です。峨山様が出された答えは、「わかりません」でした。また、「二つの月は仏様で、もう一つの月は、私たちの心の中にある仏さまのみ教え」という方もおられますが、人間的な考え方で物事を見たら、月は天空に浮かぶお月様ただ一つです。ですけど池に月が映っていたらいかがですか。天空の月は本物で池に映る月は偽物ですか。眼に映っている月という事実。どちらも本物です。池の月は偽

物と思うことこそ、「思い」にしばられているのです。みなさんも、どんどんと「思い」が沸き立つのは自然なことではありますが、それを一生懸命捕まえて大事に大事に残しているから、それが静いものもとになっているのです。もしどうしても捨てられない「思い」をお持ちの方は、この祖院にあなたを苦しめる「思い」の全てを置いてお帰りいただければと思います。本日はありがとうございました。 合掌

坐禅研修会の報告

昨年五月二十二日（木）、大手AV機器メーカー社員有志による坐禅研修会が修行され、八王子市少林寺副住職の大石隆元師が指導を担当されました。初心指導の後、本堂にて三十分間坐禅に親しんでいただきました。途中急に天候がくずれ、外は激しい雷雨に見舞われましたが、外の嵐に動じることなく、正しい姿勢で集中して坐り続けることができました。行茶の時間に、感想を頂きましたので紹介します。

＊何も考えないことがこんなに難しいのかということをはじめて知りました。坐っていますと足がしびれてきて、身体の方から「ちよっと足のこと考えてよ」

と言われたり、雨の降る音が聞こえてどんどんひどくなってきたと、傘を忘れてしまったことを思い出したり、雑念が多いと感じた体験でした。

＊途中集中力がきれてしまい、警策で打っていたできました。それから身が引き締まりなんとか坐ることができました。急に降ってきた雨の音が、集中して坐っていたせいか大きな音として聞こえました。それでいて自分とは遮断された遠くから聞こえているような気

もして、不思議な体験でした。

＊途中で雨が降ってきましたが、雨の強さの移り変わりを感じてそれが新鮮でした。いつもは雨が降っていることや、傘を差している人などを見て、頭でわかる。それが日常生活では当たり前だと思うのですが、今日は雨足を五感で感じるという体験だったのかと思います。そんな風に思えたのは、良い意味で緊張して、集



書院での行茶



本堂での坐禅

中していたからだと思います。

*始めての坐禅でしたので、眼を開いたままでいるということにまず驚きました。一点を見つめていましたが普段は意識しない左右の端の景色までが気になり、なかなか無心になるのは難しいと感じました。

*どのくらい坐るのがわからず、「何分経ったのかな」「あとどのくらいかな」など時間の経過が気になっていましたが、先程三十分ほどだったとお聞きして、終えてみれば早かったように思いました。

*坐りはじめは心のなから勝手な独り言がどんどんと出てきました。だんだん集中し始めたかなと感じてると、今度は周辺視野が広がり、いろいろなことが気になって集中力が削がれてしまう。その繰り返しだったように思います。

*坐禅中、思考がなかった時間はありませんでしたが、頭に浮かんでくる雑念は、普段出てしまいがちなネガティブなものではなく、楽しかった記憶などでした。また、手の印が崩れてきたり、ちよつとした姿勢の崩れに気づくことができた良い経験でした。
*坐った眼の前に柱時計がありましたので、ガラスに映る堂内の景色が眼に入ってしまい、頭を空っぽにするというのは難しいと思いました。でもなぜか

心地良い時間を過ごしている実感がありました。

*一つのこと集中しようと思いがちながら坐ってしましたら、思いがけず雨が降ってきましたので、雨の音をよく聞くようにしました。普段とは違い、五感を使って感じていると思うことができました。

*最初に姿勢を直していただき、何も思わないでいられる瞬間を持てたように感じて、新鮮な経験でした。姿勢や呼吸などに制約があり、みんなが同じように静かに坐るだけで、普段とは全く違う世界に入っているという事に驚きました。

*普段集中すると言えば、意識して頭を動かしたり、身体を動かすということで、そうすることが集中することだと思っていました。何もしないことに集中するということは新鮮で、こういう機会はなかなかない貴重な経験になったと思います。

*すぐに眼の前にクモがいることに気がついて気になつて仕方ありませんでしたが、動かないことがわかると今度は時間の経過ばかりが気になりました。

*途中の激しい雷雨に身体は動きませんでした、心は少し動揺してしまつたように思います。それから私は腰の具合があまりよくありませんが、なんとか坐ることができてそこは自信になりました。

秋の観音詣りの報告

昨年秋の観音詣りは、十一月九日（日）からの二泊で大本山總持寺祖院拝登及び拝宿と北陸の禅刹を巡拝しました。

曇り空の成願寺に朝六時集合。まだ薄暗い中、観音堂にて旅の無事を祈念して出発。バスは練馬インターより関越道、上信越道、北陸道と経由して富山を目指します。途中、世界遺産に登録されたばかりの富岡製糸場の話などをガイドさんから聞きながら、また秋の山並みを車窓に楽しみながら、正午過ぎに高岡インターを下りました。



瑞龍寺でご案内をいただく一行

まずは、きときと（富山の方言で活きがよい）の魚ずくしのお昼ご飯で元氣を取り戻します。甘みを感じてお刺身、カニの酢の物などをお願いして、北陸にやってきたことを実感。食事後は三十分ほどで国宝瑞龍寺へ。

美しく整備された参道を進むと、正保年間（一六四四～一六四八）建立という重要文化財の総門、美しい白砂が広がる

外苑、左右に金剛力士像、楼上に釈迦如来、十六羅漢の安置された国宝の山門と続きます。ご住職の四津谷道昭師が迎えてくださり、禅宗寺院独特の伽藍配置である七堂伽藍の説明などを受けながら、やはり国宝の仏殿、法堂へと導いていただきました。

瑞龍寺は加賀二代藩主前田利長公の菩提を弔うため、三代藩主前田利常公が建立されたのがはじまりだそうで、ご住職自らユーモアたっぷりに沿革をお話しくださいました。

バスは「のと里山海道」を北上し、五年振りの大本山總持寺祖院へ。夕暮れのなかを何人もの修行僧の方々がバスまで出迎えてくださって、感激。こちらは、平成十九年の能登半島地震の際、甚大な被害を被って、昨年春に復興の落慶法要を終えたばかり（と言っても、まだ修復の手がつけられずにいる箇所も多いそう）。新築になった客殿「摘星観ていせいくわん」にご案内いただきました。夕飯の精進料理は二の膳付きの豪華版。海草も並び、能登ならではの精進料理といった献立はどれも滋味溢れるお味付け。感謝していただきました。

休憩をはさんで、祖院で単頭兼維那を勤められる、七尾市長齡寺住職の大橋紀宏師にお説教を賜りました（二頁参照）。真新しく気持ちのいいお風呂を頂戴し、

明朝きやうてんの暁天坐禪、朝のおつとめに参列すべく早々に消灯となりました。

翌朝、坐禪に参加する有志は三時四十五分に集合。暗闇の境内を僧堂へとご案内いただき、修行僧のみなさんが坐られる同じお堂の外單に坐らせていただきました。静謐な緊張感、山々に囲まれた祖院での坐禪は心身共に浄められるような体験でした。

坐禪を終えて法堂へと朝のおつとめに向かう中、昨晚お話いただいた大橋師から、空を見上げるように促されます。お話にあったとおりに、満天の星空に北斗七星の柄杓の柄が祖院へと垂れ下がり、時代も国も異なりながらも仏法は連綿と伝えられていることを目の当たりにした瞬間でした。

法堂での朝のおつとめは、中央にご開山瑩山禪師、



朝のおつとめに参列。進み出てお焼香をする一行（祖院）



諸堂拝観（祖院）



大橋師を囲んで記念撮影（祖院）

左右に道元禪師、峨山禪師がお祀りされた莊嚴な須弥壇を前に執り行なわれました。舞うようにお経本を運ぶ僧侶の動き、堂内を満たす読経、だんだんと明るくなる外の気配、また祖院独特の読み方で上げられる「大悲心陀羅尼」は「真読」という読経法で、羽咋市永光寺を兼務された峨山禪師が永光寺での朝のおつとめを終えて、祖院に到着されるのをお待ちするために一音をゆつくりとお読みしているとのこと。峨山禪師をお慕いする心がいまも息づいているのです。特別に一行の先祖回向をしていただき、全員の名前を読み上げていただきました。

朝のおつとめを終えると外は清々しい朝の空気に。冷えた身体に温かいお粥がしみいるような朝ご飯をいただきました。身支度を調べて、境内の紅葉を愛でながら諸堂をご案内いただきました。祖院は明治三十一年の火災で伽藍の大部分を焼失しましたが、他のいくつかのお堂とともに「伝燈院」という建物が災禍を免れたそうです。こちらは、ご開山瑩山禪師の祖廟であり、本山が鶴見に移され百年を経過したいまも崇敬の中心となっています。本山が移されることになった当時の様子など興味深

く拝聴しました。山門前で記念撮影を終えると祖院を後にし、ほど近くの輪島の朝市へ。

物々交換から始まったという朝市は千年もの歴史があるそうで、カニや甘えびなどの海産物を中心に名産品輪島塗の品物も数多く店先に並んでいます。一時間ほどの買い物を楽しんで、バスは能登半島を南下。高岡市の臨済宗の大本山國泰寺へ。

本立に囲まれた参道を進み総門をくぐると、重厚な造りの山門、その先には龍淵池、法堂と連なりなんとも趣き深い風情。大方丈にて副司の山田栄行師にご案内いただきました。同じ禅宗として知られる臨済宗は、曹洞禅と同じ教義も多くありますが、修行道場の中で会話や談笑することを誡める三つの場所「三黙道場」は異なるそうで、曹洞禅では、僧堂、浴司（風呂）、



眼をうばわれるほどの巨石が並ぶ庭園「月泉庭」（國泰寺）



観音様のお話をいただきました（永光寺）



合掌造りの前で（白川郷）

東司（手洗い）を差しますが、臨済宗では、僧堂ではなく食堂が入るそうです。また、大方丈の眼の前の月泉庭にはごつごつとした巨石が多数配されています。中央には約四二トンもあるという巨石が堂々と鎮座し、庭園の石としては日本一だそう。他に類を見ない野趣あふれるお庭を拝見しました。

続いて羽咋市の永光寺へ。こちらは瑩山禅師開創、また示寂の道場として知られる名刹です。法堂にご案内いただき、お経の後、ご住職の屋敷智乗師にお話をいただきました。また、観音奉賛会である私たち一行のために、数十年に一度ご開帳するかしないかという秘仏、瑩山禅師のお母様である懷観大師の念持仏という観音様を特別に拝させていただきました。あまりのありがたいお姿に感動と感激で言葉が出ない一行でし

た。茶菓のおもてなしを頂いて永光寺をあとにすると、日本一の名旅館として名高い加賀屋へ。山海の珍味と名湯と倉温泉で旅の疲れを充分に癒しました。

翌日は東海北陸自動車道を利用して白川郷の合掌集落へ。晴天にも恵まれて紅葉もちょうど見頃。散策を楽しんで、東京への帰路へつきました。

山内短信

◎春彼岸中日法要「修証義奉読会」のお知らせ

三月二十一日（土） 春分の日

午前十一時～

受付

十二時二十分～

講談・日向ひまわり師

午後一時

檀信徒総回向

◎春の観音詣りのお知らせ

【日程】四月二十九日（水・昭和の日）

柴又帝釈天題経寺の参拝をメインに下町巡りを
楽しみます。樹齢六百年のケヤキの立木に刻ま
れ、いまもその地に根を張り地域を見守る立木
観音も巡拝。昼食は柴又の老舗「川甚」を予定。

【会費】一万三千元

◎向台子育て地藏尊大祭の報告



昨十一月二十三日（土）、弥生

町一丁目に鎮座する「向台子育て
地藏」の大祭が執り行なわれまし
た。このお地藏様は旧本郷村の念
仏講が「子供と道行く人の安全を
願ひ建立」したと伝えられていま
す。参集した近隣の子どもたちの

健やかな成長と地域の交通安全が祈願されました。

◎ケーブルテレビ放映のお知らせ



本堂に繋がる回廊にお檀家の福嶋康博様にご寄進
いただいた十一面観音様が安置されています。その
截金と彩色を手がけた長谷川智彩
師を特集する番組「美・JAPAN 截
金―仏画彩色・崇高な極限美」が
ケーブルテレビ（J:COM）で制作
され、取材を受けました。放映時
間は各ケーブルテレビ局により異
なります。ぜひご覧ください。

◎前田康成氏の個展を本堂地下にて開催（入場無料）



当山縁起の絵本「なかのちようじやとじようがん
じ」と現在制作中の縁起看板の作
画を手がけていただいた、前田康
成氏の個展「赤い墨彩画展」が本
堂地下において開催されます。お
立ち寄り下さい。

【日程】三月二十九日～四月五日まで

十一時～夕四時